

雪彦山の植物概要

故田代善太郎

雪彦山の景勝をなす一分子として植物を観察するにも、植物地理の方面より之を研究するにも、山腹以の樹林帯（喬木、灌木、蔓木の別等）と上部の岩石帯との各方面に亘り汎く之を踏査して樹種類、数量、其發育及生態、常緑潤葉樹と落葉潤葉樹や針葉樹との割合山林の下草、岩石上の小灌木、草本の種類及生態を明かにするを必要とすれば今は其時日なく僅に昨日登山路に沿ふて植物調査上の経験なき一村民の採集したる岩石地帯の植物を見、木本の顯著なるものにつき其知る所を聞きたるに止まれば之を材料としたる記述は、其真相を伝ふるに足らざれどもなほ其一斑を知るに足らん。

山腹の下部には栽植せる杉の外にはカシ類（近畿に産する過半アラ、ウラジロ、ツクバネ、アカカシを有するもの如し）シヒ類其他の常緑潤葉樹多く、数種のカベデ類、其他の落葉雑木を混ず、上部にはサクラ類、モミ、ツガ、ネツの針葉樹に交ふるに若干の落葉潤葉樹を以てす。灌木若しくは灌木状をなす、かくて上部の岩石帯に移行す。此間にキサハゲの多量を存するは邦内其比を見ずと伝ふ、我等此種植物の所々に散在するを以て見て自生なりと見做したるの誤らざるを知るなり。

イハカガミ、アケボノツツジ、ヒカゲツツジ、ホツツジ、イハナシ、オホバシヤクナゲ、ミヤマシキミ、キハギ、ナンキンナナカマド、ツクバネ、ツタウルシ、シンジュギク、サハギク、イナモリサウ、ミヤママ、コナ、コバナタツナミサウ、ミツタピラコ、ツルリンドウ、ユウレイタケ（寄生）、ミヤマカタバミ、シハイスミレ、ジンシサウ、ツメレンゲ、ヤ

マキクマン、キケンシヨウマ、セントウサウ、オホバチドメグサ、バイクワウレン、ミヤマタニソバ、フタリシヅカ、セツコク、オニユリ、チゴユリ、ツクバネサウ、ノギラン、ヤマヂノホト、ギス、マムシグサ、コタニワタリ、イハヤシダ、イハヒバ、イハタケ、サルガセモドキ、オホシラガゴケ、カウヤノマンネンシギ、

！上につき地理的分布より之を考察するに、大体に此地方相応の植物群なれど、イハカガミ、ホツツジ、イハナシ等寒地性植物の標高此程度の山地に生ずるは近畿中国に於ける山地通例なれど本州中部に比して考ふれば珍とするに足る。又ツクバネ、コタニワタリは中国を以て南限とする——分布は多少注意をひくに足る。アケボノツツジ、ヒカゲツツジ、オホバシヤクナゲ、シンジュギク、イナモリサウ、コバナタツナミサウ、オホバチドメグサ、イハヤナギシダ等暖地性植物を有するは注意すべく就中、アケボノツツジは四国、九州にあるも本州には其例を見ざるものあり、（苗を見たるのみで其他を見ざれば斷言する能はざれど）播州にはモチツツジあり、暖地性植物分布し赤穂の海岸には其種類に富み發育よろしきを以て夙に天然記念物たる生島あり、隣接せる揖保郡には支那中国以南に産するコヤスノキを産し、暖地性植物として形態の奇に分布乏しきを以て（伊勢にて）天然記念物となる。ムカデランのあるあり、リウキウゴザクラあり、又沿海地方にはノヂギクあるを見れば雪彦麓放の地帯を精査せば意外のものなしとせざるべし。

私のやつた仕事

故田代善太郎

（註）この稿は田代の古稀にあたり母校福島師範学校同窓会よりの祝賀に対して答へたる自己の植物研究業績の概要であります。この報告文は他日固有日本植物地理研究史の準備資料として記録しおいたものであります。

私のやつた仕事は植物の採集及び之が処理に関すること、其研究調査に関することである。此両者は相伴

う場合が多く時には既往の資料を互に比較し又之を総括する。植物採集は北は樺木より南は沖縄に及び朝鮮にも一寸行きました。本土以南は隠岐、佐渡を除きて一通りまわつて分布標本を得ることを心掛けています。所蔵標本は学生時代のものは福島師範学校勤務時代に整理して根本莞爾先生にあげたが其後のものは注意すべきは之を分ちて根本先生にあげ多くは東京科学博物

館の標本になつた筈である。私が鹿児島県加治木中学校勤務時代に整理したる其他の一組の標本は後藤静香氏の紹介により大阪の桃谷順一氏の好意を以て腊葉標本戸棚と共に京都大学理学部の植物標本館に納入することが出来た。之が代価として桃谷氏の借金せる5000円は田代の日本植物研究の資金となつた。之に先つて米国の木本研究家ウキルソン氏鹿児島に來り希望により我所蔵品をみせ又標本一通りを寄贈した。それはアーイルド植物標本館に収納せられた。又台北大学林学部教授金平亮三氏に対し知友堀川安市氏の紹介にて奄美大島及沖縄島の木本標本を寄贈した。其後の採集品は京大の植物標本館に入れ又根本先生に寄贈した事は前の如くである。牧野先生を始め専門の学者に研究材料を提供したことあり其他にも所望せられて諸々に寄贈し知友と交換したることも多し。

採集につぐに調査研究を以てすることは常例でありいつもノートを持参して其品目を記入し之を国別植物分布調査表に登録して調査の基本資料とするのである。之を明治40年代長崎高等女学校勤務時代より継続したのであつた。今時代を逐ふて主要なるものを挙げれば熊本師範学校勤務時代には阿蘇外輪山を横ぎつて別府にゆき、又人吉より飯野越をとほりて宮崎に行き青嶋、鶴戸、油津、飢肥、都城をへて大隅高原を横ぎり海をわたつて鹿児島に行き指宿をへて山川と行き帰途を阿久根より天草にとりてかへる。

長崎県高等女学校勤務時代には肥後の祖母山、阿蘇山及市房山に採集を試み、肥前には雲仙嶽、多良岳、五島、豊岐対馬等をまわり一通りの採集をすませた。かくて最初の長崎県植物目録を監修した。之は其後外山三郎、千葉常三郎氏の編輯せる長崎県植物目録に併合せられ我は之に跋文をしるし、また分布地図の作成に指導を与えた。又豊岐植物目録は我等の再遊によりて成稿を見たのであるが、対馬植物につきては原友一郎氏及我等の採集によりて矢部吉禎氏の対馬植物目録にヒトツバゴ其他を加ふる処あり其後幾度か採集を試みたる外山氏の努力と我の指導によりて行はれた採集会にて知り得たる所を綜合して外山氏によりて対馬植物目録の出版を見るに至つた。

明治39年福岡師範学校教諭東作太郎氏の斡旋によりて成立したる英彦山夏期植物採集会に於て牧野富太郎先生を聘するを得爾來九州を一巡して同様の計画を実行するの議を決し44年まで実行した私は其主動者であり二、三度は私が其幾分を代理した。此挙は九州の植植研究を進むる上に於て少からざる効果があつた。而して牧野先生の五島採集旅行は私の採集報告に刺戟せられたものであつた。

次に加治木中学校勤務時代私に南部の植物や暖地性植物研究の機会を与えたものである。而して植物の研究調査に関する幾つかの活動をなした。大正の始めに転勤し翌年桜島の噴火に出合ひ之が植物に与ふる影響を觀察する機会を得た。藤井健次郎先生の調査行に伴ふた。又牧野先生をも案内した後に簡単な記録を謄写に附した。又之が觀察は後年桜島の噴火と植物との關係を書くに役立つた。

三好博士の勤務により本邦九州以北に於ける暖地性植物分布表を作成した。(史蹟名勝天然記念物紙上に掲載)之が私の天然記念物調査に關係する縁故をなしたものである。之がやがて暖地性植物の段階的分布に發展し私の研究題目の主要なるものとなつた。其一片は植物分類地理に掲載せられた。各地方の資料を整理して之に加ふれば之を総括しうべきに至つた。

前の時代に於て牧野先生を聘して九州一巡の植物夏期講習をすませついで中国と四国とに及ばん計画を立てたるも明治天皇の大故にあひ中国に1回開きたるのみにて中絶し四国に及ばず尤も 国にては其後牧野先生の帰國を機として土佐各地に採集講習会を開くことを得た。

次には上とは關係なく原田萬吉氏が毎年夏期に私的の採集講習会を開き植物の踏査に後進の指導に貢献することが多かつた。我は常に其講師として關係した其業績は九州各地に及びたる肥後の五箇庄を横断して更に日向の西北部に及びたると、屋久島縦断の大採集会を開きたるが如きは甚尤なるものであつた。又其一たる英彦山採集会の帰途大分に立寄り佐伯の奥より日向にぬけ縦貫の採集会を試みたが此行に於て固尾溪谷にヤマナシ、ビハの多産を知りホウライクツジャクを発見し日向の北中部にてミノメシダ、カハラハンノキ、モミヂカウモリの多産を発見した。而して大分にて和田信一氏と山本義光氏とにあひたるが大分県植物調査の機縁となつた。

大分県中、小学校総動員植物調査は前記両氏の尽力、視学官横尾惣三氏の英断、各郡委員の尽力によりて出来たもので私は其採集を指導し標本の検定にあづかつた。其結果としてできたものは県の植物総目録である。由来大分県は注意すべき植物に富み興味ある地方であるので祖母山及傾山、久往山、耶馬溪地方(英彦山、犬岳を含む)豊予海峡地方など精査せられてある。祖母山は日向側よりも精査を加へられた。比較研究のため肥後の内大臣山や日向の尾鈴山をみて植物目録をつくる。

之につきて愛媛県下全部の植物採集指導の機会を得て、山本一氏、緒方松蔵氏等と先覚者の跡をつぎて踏査し知る処多かつた。次の時代に後進輩出して研究願

る発展す。聖予海峡は諸島岐をも精査せられた。

九州植物の分布相をほぼ知り得たりと思ひたるにより「九州植物地地概論」をまとめた。九州大学を会場として行はれたる大日本学術協会講演会に之を演説し其雑誌に掲載せられた。

(註) 日本学術協会報告第4巻記載昭和3年

森林植物調査 鹿児島大林区署の委嘱により霧島森林調査をなし同じく又屋久島森林植物を調査した。

天然記念物調査 内務省及鹿児島県の囑託としてヘゴ、ソテツ、ピロウ、ナタナレノキ、クスノキ大木、ヤツロサウ、ノカイダウ及屋久島保護林は鹿児島大林区署の設定したものでほ屋久島植物を網羅するが故に広く全島の植物を調査して、其代表的なるを認めて報告したれば其設定区域が指定せられたのである。其他鹿児島県にありては全県を調査し天然記念物と考察すべきものを挙げて報告書を認めた。また時に暖地性植物につき考察する資料を得るため約3ヶ月に亘りて奄美大島及沖縄植物を視察した。

大分県にては内務省や同県の囑託として黒岳国有林を調査した。又各種の天然記念物調査に参与した。

長崎県囑託としてはヘゴ、ピロウ、ソテツ、タチバナ、ナタナレノキ、ハマデンチャウ、其他の離島に於ける暖地性植物を調査し報告書を提出した。

最後に京都大学理学部時代の行動につきて述ぶべし。此時代には毎年1,2回の公的出張あり、営林局の委嘱による出張あり、又大演習等の機会に地方の植物調査を行ふて天覧を仰ぎ奉らん為採集指導の出張あり、植物同好会に定期的採集指導あり各地方博物見界の採集指導を求むるもの多く、かくて採集旅行は行き亘り四国の残りをすませ近畿と中国とは次第に及ぼすことが出来た。脊梁山脈の高山にも登ることが出来北陸、北海、関東に及ぼし東北、北海道、樺太にも及ぼすことが出来たが、なほ不充分なれば之を今後にまたねばならぬ。

先づ挙ぐべきは汎太平洋学術会議後、見学すべき箇所調査である。我大学で引き受けたのは「噴火と植物との関係」といふ題目で別府、阿蘇、桜島、雲仙嶽を郡場教授と共に調査し英文にてパンフレットをかいた。次には

聖上陛下奄美大島行幸の際植物目録を編し注意すべき植物の標本及生品と共に天覧に供し奉つた。私は此事に関係する事が出来た為数時間陛下と共に御召艦の甲板上に居ることの光栄を許された。甲板の卓上に陳列したるを河越高等農林学校教授が一時間にわたり、説明申上げ、その後で私は鹿児島県の暖地性植物の分布につきて17分間にわたり説明申上げた。(植物目録、分布地図並に説明書は奉呈し植物目録は京都大学理学

部植物学教室と鹿児島高等農林学校教室とにあり)

秋期大演習に伴ふて行はれたる諸県の植物調査まづ岡山県に行はれ範を大分県の総動員植物調査にとつたもので植物腊葉標本を作製し植物目録をつくつた事にかはりはない。同県の植物研究は牧野先生との関係もあり篤志者ありて前後につゞく、吉野善助氏は其尤なるものにて山口国太郎、坪井近三、小坂弘、其他の諸氏輩出して目録をつくり分布調査をなし分布地図を認めた我は常に此等と接触を保つた。

熊本県は之につゞ、上妻博之氏、前原勘次郎氏其他の篤志者輩出し今に研究をつゞける両者は共に植物目録の名著あり、我とは師弟の関係ありて接触を保つ爾来上妻氏の記念採集会は近く98回に達すべし

(註 現在は271回)

福井県また之につゞ本県の植物調査は堀芳考氏其他の篤志者あり学検教員の特に熱心なりし為良好の成績にて聖上陛下側近の高官よりお褒めの言葉ありたりとて県は之を告知したるほどなり。作成したる目録も分布地図も理想的であつたと思ふ。分布地図には県の植物地地概論を添えた。

宮崎県の調査は地域大なるに拘はらず採集指導短期なりしを以て徹底せざるの憾ありしもなほ注意すべき植物の分布を調査し分布地図をかき長文の説明を認む、北部は緒方松蔵氏かつて精査につとめた。

三重県の調査 大演習を機として行はれたる三重県高等農林学校の調査を援助し矢頭猷一氏のつくりたる目録を補修し分布地図を認めたが時局のため中止せられた。由来三重県植物は本草学者によりて夙に研究せられたもので頗る興味あり、榎賀安平、伊藤武夫、小田哲夫、安井直康、孫福正、水谷盛立氏によりて地方別に調査せられた目録其他の著書もあり外帯地方に分布する植物の推移は注意すべきものであり我は矢頭氏と之が調査を始めた。

森林植物調査熊本営林局、大阪営林局、東京営林局、鳥取営林署の委嘱によりて之を行ふ、熊本営林局のためには、大隅半島地方、阿蘇外輪山、内大臣山の採集指導と調査とを行ひ、大阪営林局のためには本邦中部の高山、北陸地方、山陽地方に之を行ひ、川本署及鳥取署には其所管内の国有林に之を行ひいづれも目録をとどめた、又其他青森営林署管内の代表的諸山を一通り踏査し岩手県宮城県にも及ぶ。

近畿植物同好会毎月採集会を開く地域内の採集指導及植物調査のため夏期等には高山や遠隔地にゆく事あり、其結果として田代、堀勝(幹事)共著の大分府植物誌成る。此会は特志者数名の支持によりて維持せらるるものである。

年々連続して開会せらるるものに数者あり其一は兵

庫県博物学界にて六栗郡奥谷国有林や船越山の採集会等は其採集記事や植物目録が会誌に掲載せられた。又播磨植物目録が出版せられた、又篤志者あつて其地方の目録や分布地図を作つている田口美智太郎氏の但馬植物目録があり、西摂地方と六甲山麓を含み牧野先生や山島吉五郎氏の採集其他石川栄之助氏の綿密なる踏査目録もありて分布分明になりたるを以て我等は分布地図を再記した。

近年大分県の植物調査は県教育会の主宰により県植物誌編輯の目的を以て近年相つて採集会を開かれ近く完結を見んとしている其他福井県、岐阜県、長崎県の博物学界等に年々採集会が開かれ又四国、中国、近畿、北陸の各地にて開かるる事多く枚挙に遑あらず、前記以外に指導を与へたる人々の著述をあぐれば左の如し

- | | |
|------------|------------------|
| 日高 靖一 | 多良岳植物 |
| 土井 美夫 | 鹿兒島県植物誌(敬禮) |
| 吉岡 重夫 | 企救郡植物誌 |
| 中島 一男 | 福岡県植物誌(壺岐、対馬、其他) |
| 清原善太郎 | 豊予海峡植物誌 |
| 緒方 松藏 | 南北宇和郡植物誌 |
| 山下 幸平 | 南予植物誌 |
| 八木 繁一 | 愛媛県植物誌 |
| 金吾 一角 | 周桑郡植物誌 |
| 阿部 近一 | 徳島県植物誌 |
| 村田 主計 | 関門植物分布地図 |
| 池田美成、矢野 厚 | 秋吉台植物目録及分布地図 |
| 岸野頼三郎 丸山 巖 | 島根県植物目録 |

- | | |
|-------|---------------------|
| 吉川 純幹 | 奥能登植物誌 |
| 古藤 源 | 越中婦負郡植物誌 |
| 杉本 順一 | 植物目録並に植物地理に関する数種の著書 |

右の外にも各地方で指導を与えたる中には、目録を編纂し又雑誌に発表する人はいくちもある。私は植物採集のため多年に亘り各地を旅行して相会する人々を指導し、又質疑品や寄贈品を見る機会が多かつたので地方に於ける篤志の研究家は大概其人と業績を知つて居る。之を自分が直、間接に關係したものに加ふれば、やがて自分を主とする固有日本の植物地理研究史といふべきものができるであらふと思ふて其機会をまつて居る、而して我等の研究はなほ前進して其内容を充實すべきであるから地方研究家と共同して分布を調べ分布地図、目録をつくる等のことをしたいと思ふて居る、今研究題目とすべきものを挙ぐれば次の如くである。

(註) 研究題目省略

今までは研究資料をよせて時々まとめをつけると云ふ程度にしか出来なかつたから今から為すべき仕事が多い其成否は要するに年月の問題であるが研究事項は互に連絡している。或程度のまとめは出来よう。されどいざまとめをつけるとなれば現地を再び踏査せねばならぬし、種類の研究が分類学者の輩出するにより其進歩があり変遷があつて検討を要するから其判断の容易ならぬものがある。而して郷国より北の方にかけては前記の如く研究なほ不充分故今後互に奮励して一週の調査を遂行せねばならぬと思ふ。昭和16年6月稿

93頁より続く

た。

- (1) 性比の調査をしたコシマゲンゴロウ外数種においては、7~9月の季節的消長には雌雄に大差が無い。
- (2) それらの種においては、時間的飛来曲線に性による相違は全く認められず、これは他の水棲甲虫にも該当するものと推定される。
- (3) 飛来数の気温に対する正相関が比較的著しく、特に冷涼の候においては最も著しい。
- (4) 飛来に対する湿度の影響は明らかでない。
- (5) 霧のような僅かな雨はほとんど飛来を妨げず、高温無風ならば少々の雨でもかなり飛来する。しかし驟雨のために飛来が増加するということはない。
- (6) 暗さに対し負相関が著しくあらわれ、月明のある方が飛来が多い。
- (7) 風の影響も大きく、飛来を妨げることが著しい。風力3程度で飛来が中絶することが多い。

参考文献

1. 江口 貢(1932): 誘蛾燈成績、朝鮮総督府農事試験場彙報、7(1) (直接参照せず)

2. 井上 寛(1950): 夜間採集、新昆虫、3(9)
3. 加辺正明(1951): 森林害虫としてのモモゴマダラノメイガの燈火に飛来する型の雌雄の違い、新昆虫、4(8)、昆虫、(未刊)
4. 野村健一(1937a): 屋久島に於る蛾類の趨光性に関する観察2・3、昆虫、11(1~2)
5. — (1937b) 蛾類の趨光性に就いて、応用動物、9(6)
6. 清水恒久・大野正夫(1949): 螢光誘蛾燈に対するヒメゴガネの趨光性活動、昆虫、22(5)
7. 玉貫光一・夜久春夫(1935): 誘蛾燈による趨光性昆虫に関する調査成績、樺太庁中央試験所報告、11.
8. 島居西蔵(1939): 誘蛾燈より見たる蛾類の活動型に就いて、植物及動物、7(7)
9. 八木誠政(1935): 二化螟蛾の夜間活動性について、農事試験場彙報、2(4)
10. 山本義丸(1951): 螢光誘蛾燈に飛来する水棲甲虫の趨光性活動(第1報)、応用昆虫、7(1)